

天理市埋蔵文化財センターだより

Vol. 2

特集 『発掘の現場から - 地下に眠る天理の昔々 -』

大和古墳群の埴輪と土器



夏の文化財展はじめました

2006年8月9日(水)

~23日(水)

※月曜日は休館日

天理市文化センター

1階展示ホールにて

天理市教育委員会 文化財課

天理市教育委員会文化財課では、これまでに市内遺跡を対象とした多くの発掘調査を実施しています。そのなかには開発行為に伴う発掘調査のみにかぎらず遺跡の範囲確認や史跡整備に伴う学術目的の調査も実施していますが、これらの調査成果についてはなかなか市民の皆さんの目に触れる機会が少ないのが実情でした。

そのため、今年度から『発掘の現場からー地下に眠る天理の昔々ー』を統一テーマに天理市文化センター1階展示ホールにおいて年に二回の文化財展を企画し、夏には遺跡や遺物、時代ごとにテーマをしぼった企画展を、冬には前年度の調査速報展をおこなうことで市内の埋蔵文化財について理解を深めていただけるよう努めたいと考えています。

今回の「センターだより」誌面では、夏の企画展「大和古墳群の埴輪と土器」で展示する古墳出土の埴輪や土器などについて紹介することにします。

おおやまと こふんぐん

大和古墳群の埴輪と土器

西殿塚古墳と東殿塚古墳の埴輪



西殿塚古墳の初期埴輪



古墳のまわりに立て並べられた埴輪は、弥生後期の吉備地方で墓の祭祀（まつり）に使われた「特殊壺・特殊器台」をもとに大和古墳群のなかで誕生しました。こうした初期の埴輪で最も古いものは、中山町の中山大塚古墳で出土しており、いずれも壺や埴輪の口縁、胴部の文様、巴形や三角形の透かし孔のかたちなどに吉備地方での特徴を残しています。

西殿塚古墳の埴輪には、有段口縁に鋸歯文（きよしもん）を巡らしたものなどがありますが、大型化するものや三角形、半円形などの透かし孔もあり、「埴輪」としての独自性を見ることができます。

東殿塚古墳の埴輪では、西殿塚古墳の埴輪には見られなかった朝顔形埴輪や鱸（ひれ）付き円筒・楕円筒埴輪が出現し、さらに「埴輪」としての成り立ちが認められています。

朝顔形埴輪は、器台と壺の組み合わせを一体化したのですが、東殿塚古墳の埴輪では壺のかたちや壺と器台のつなぎ目付近の特徴に吉備地方の特殊壺・器台のなごりを見ることができます。

鱸付き円筒・楕円筒埴輪は、墳丘にたくさん並べる必要から考えられたものと思われます。初現期のものとして重厚で丁寧なつくりの鱸が特徴となります。



東殿塚古墳の初期埴輪

波多子塚古墳の埴輪

菅生町の波多子塚古墳では、墳丘や周濠から初期の埴輪の破片が多く出土しています。有段口縁のものや鱸付き埴輪、楕円筒埴輪、朝顔形埴輪などがあります。

ここでは鋸歯文の残る埴輪片がいくつか見つっていますが、いずれも胴部に描かれており、西殿塚や東殿塚の埴輪のように口縁に施されるものは見られませんでした。

全体がわかるものはありませんが、細かな特徴から西殿塚古墳や東殿塚古墳に続く時期が考えられます。



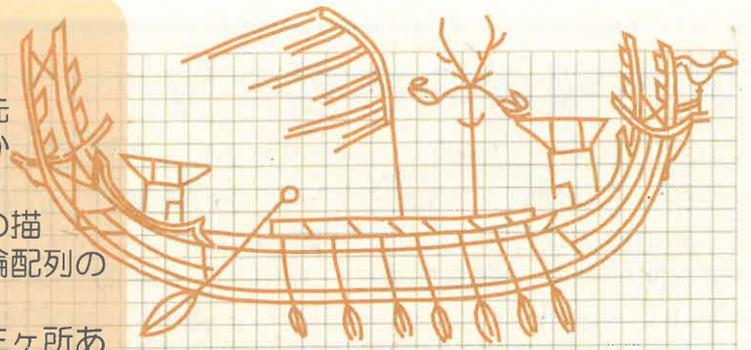
波多子塚古墳の初期埴輪

絵が描かれた埴輪

東殿塚古墳の初期埴輪には胴部に鋭い刃先で線刻された絵画の描かれるものが見つかりました。

前方部西側裾の埴輪配列では複数の船画の描かれるものがあり、「葬送の船」として埴輪配列の意義を示すものと解釈されています。

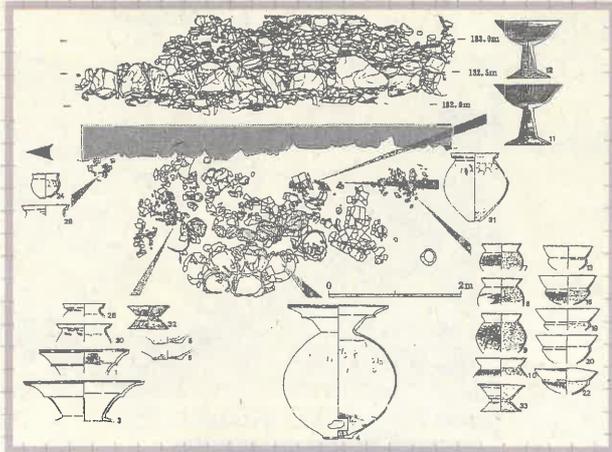
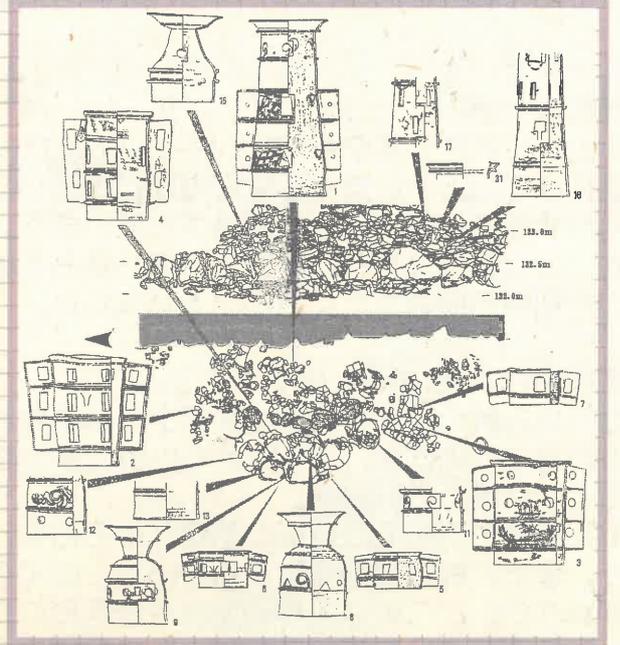
船画は、鰭付き楕円筒埴輪の前後面に計三ヶ所あります。最も大きく描かれた前面下段の絵には、舳先ににわとり、船上に幡（はた）、蓋（きぬがさ）、屋形などが描かれ、船体には当時に実在した準構造船が細密に表現されています。



前面中段の絵では、舳先の大きなにわとりと船上の剣（つるぎ）が特徴となります。

また、後面の絵では提灯（ちょうちん）が見られ夜の世界を表現しています。

東殿塚では、ほかに墳丘上の埴輪に盾（たて）の絵が描かれた物も見つかっています。



東殿塚古墳の土器

東殿塚古墳の埴輪配列には、お供えとして多くの土器が添えられていました。二重口縁壺や複数の小型鉢・器台のほか、甕、高杯などがあり、近江や山陰地方など他地域の土器も見られることから葬送のまつりには広域にわたる地域からの参加が考えられます。

これらの土器は、初期埴輪の時期を考える基準となるばかりでなく、古墳での祭式を考えるうえでの重要な手がかりとなっています。



マバカ西古墳の壺形土器

マバカ西古墳の周濠からは埴輪片とともに複数個体の二重口縁壺が見つかりました。これらの壺には焼成前からの底部穿孔が見られ、当初より墳丘に並べることを目的に作られたものです。

ほかにも吉備地方の特殊壺のなごりを留めた形態のものも出土していますが、どちらも大和古墳群では類例の少ない貴重な土器です。



文化財課からのお知らせ

天理市教育委員会文化財課では、今年度以下催し物を予定しています。

■遺跡探検隊2006

◇平成18年11月18日(土)
標本周辺の遺跡と古墳を親子で巡るハイキング
※詳細は広報誌「町から町へ」でお知らせします。

■冬の文化財展

『発掘の現場から—地下に眠る天理の昔々』
平成17年度発掘調査速報展示
◇平成18年度12月6日(水)～21日(木)
※天理市文化センター1階展示ホールにて

大和古墳群の古墳たち

奈良盆地東部の山麓沿い、天理市萱生町・中山町付近には、古墳出現期～前期初頭（3世紀後半～4世紀前葉）の初期の前方後円墳や前方後方墳が多く築造され、「大和（おおやまと）古墳群」と呼ばれています。柳本や箸中（桜井市）の前期古墳群も含めて広い意味で呼ばれることもあります。本来は古い地名でのおおやまと郷の範囲にあるこの一帯の古墳群を指す名称となります。

■西殿塚古墳(にしとのづかこふん)

中山町に所在する全長230メートルの前方後円墳です。

現在は手白香皇后陵として宮内庁が管理しており墳丘上では特殊器台や円筒埴輪の破片が採集されています。1993年の東側墳丘裾での調査では葦石と周濠状の落ち込みを確認しており、その際にも初期の埴輪がたくさん出土しました。

■東殿塚古墳(ひがしとのづかこふん)

西殿塚古墳の東隣で同じ尾根筋上に築造された全長140メートルの前方後円墳です。萱生町と中山町にまたがり大和古墳群では最高所に位置しています。

1996年の調査では葦石の基礎となる石列と葦石が確認されました。また、前方部西側に「造り出し」のような突出部があることがわかり、ここには大小の埴輪を三角形に立て並べた祭祀（さいし）の場が作られていました。この祭壇のような施設には朝顔形埴輪や鱸付き円筒・楕円筒埴輪など西殿塚古墳には見られなかった新しい特徴をもつ初期の埴輪とともに古い形式の布留式土器、二重口縁壺と近江・山陰系の土器が添えられていました。

葬送の船が描かれた鱸付き楕円筒埴輪は、造り出しの祭壇南端に立てられていました。

■波多子塚古墳(はたごづかこふん)

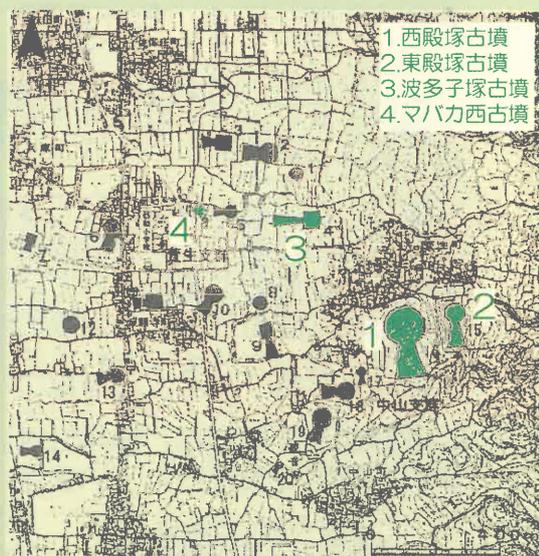
萱生町にある全長140メートルの前方後方墳です。前方部が異常に長い特異なかたちの前方後方墳として知られています。

1998年の調査では墳丘裾の葦石や周濠が残ることが明らかとなりました。また、周濠の外側の堤で竪穴式小石室も見つかっています。墳丘や周濠から出土した初期の埴輪は破片ばかりでしたが、朝顔形埴輪や鱸付き円筒埴輪、特殊器台形埴輪などの組み合わせが見られ、それらの特徴から東殿塚古墳に続く時期が考えられています。

■マバカ西古墳(まばかにしこふん)

2002年におこなわれた成願寺遺跡の発掘調査で新たに見つかった小規模な古墳です。後世の耕作等により削平された古墳（埋没古墳）であるため墳丘は失われていますが、古墳まわりの周濠のみを確認しています。周濠のかたちから古墳のかたちは前方後方墳であったと考えられます。マバカ古墳の西側でみつかったことから「マバカ西古墳」と命名されました。

周濠からは円筒埴輪片や墳丘上に巡らされていた底部穿孔の二重口縁壺などが出土しています。



■大和古墳群の古墳分布状況



■東殿塚古墳の墳丘と葦石



■波多子塚古墳の墳丘裾葦石



■マバカ西古墳の墳丘と周濠

発行◆天理市教育委員会 文化財課

天理市埋蔵文化財センター

〒632-0017 奈良県天理市田部町320

Tel・Fax 0743-65-5720

印刷◆天啓 天理市森本町810